

原爆に想う

●南荻窪三丁目

平野 武夫

(明治四〇年生まれ)

一 太平洋戦争も末期に近づく

昭和二〇年、中国の要衝、武漢三鎮の前衛線、応城付近を警備中の我々部隊は三月三日八路軍の討伐終了後、一部将校・下士官は引抜かれて戦闘急を告げる本土防衛のため、漢口から越漢線で中国の古史で名高い、函谷関を通過し信陽・開封・石家荘を過ぎ、山海関を越え本土を目指し転進を始めたのは六月の初めだった。

我々は龍山で部隊を編成し、自分はK大隊、第四中隊長として指揮を取ることになった。K部隊は白頭演習のため〇〇に向かい進発すべしとの命令を受け朝鮮鉄道を南下し、着いた所は蔚山だった。加藤清正が苦戦を強いられた昔話を思い出し、K大隊もここで全滅かなと覚悟した。部隊の任務は、米軍の占領に備え蔚山飛行場の警備だった。飛行場を見下ろす山の山腹に掩体壕を造る作業を始めた。

二 広島市に新型爆弾投下

八月七日だったろうか。部隊の内部に「広島市に新型爆弾が投下され、広島市は全滅。己斐・横川付近のレールは飴の

ように溶けて曲がっている」との情報が流れた。作業は続けられ一五日が来た。「今日重大放送がある」と大隊本部から通達があった。それが「終戦の天皇陛下の玉音放送」であった。それから部隊は山を降りて民宿が始まった。この新型爆弾こそ原子爆弾だった。戦争は負けたと部隊一同涙した。

三 復員そして広島へ

幸いアメリカに連行されることなく、九月三〇日釜山を発つて、翌朝山口県の仙崎港に上陸し、部隊は解散し、二日昼過ぎ広島駅に着いた。ホームの屋根は吹っ飛び、懐かしい白亜の駅舎も壊れて見る影もない。南は御幸橋、西は三滝の山下まで焼け野原で、市内の所々にコンクリートのビルが残っている。想像以上の被害に驚く。

四 肉親の原爆犠牲者三名

さて牛田の兄の家に帰っても寝る所もないだろう。家の残骸でも眺めて今夜は山の上で野宿を覚悟で、焼津神社の裏を太田川沿いに牛田を目差し、トボトボと足を運んだ。幸い兄

の家は焼け残っていたが、縁側の障子も硝子障子も壊れ、建具に天井板を打ち付けて、家の中は昼も薄暗い。しかし家族一同（女六人男一人）喜んで私を迎えてくれた。しかし兄は原爆に遭い一〇日に死亡。長男も県立第二中学校の建物疎開作業中負傷し、似の島に送られ死亡。二番目の兄も当日硝子の破片が胸を貫き出血多量で死亡。市内にはまだ人骨が見られ、原爆の惨めさを嫌と言う程知らされた。

五 S代議士（我々の媒酌）と再会

年が明けて二月の寒い日だった。県立第二中学校の職員・生徒の慰霊祭が市内のお寺で催され、兄の長男の遺族として参列した。そこで計らずも、媒酌のSさんと会い、代議士の次男も建物疎開の犠牲で亡くなられたことを知った。「お前戻ったか。家内や子供はどうした」「龍山の部隊に面会に来ましたが、新京に帰したので全然分かりません」「俺も家内を亡くしたが、君の家内も今新京にいるようじゃあ、もう戻って来んで、俺が世話するから新しいのを貰えよ」と言うような話を交わした。それからSさんと会う機会もなく、半年が過ぎた。二二年九月二一日家族四人、藤田組の社員九四人と共に帰って来た。Sさんが私たちの仲人だと言って若し再婚していたら、大変な家庭の悲劇が起こっていたことであろう。戦後そんな話は度々聞いた。

六 原爆慰霊祭に参列

それから約一年後、八月六日第二回目の慰霊祭に子供を連

れて参加した。暑い暑い夏の日照りに子供たちの喉を潤す、飲みものも水もない。兄二人・甥一人そして多くの被災者の冥福を祈り、宝町のバラックまで帰り着いた。そのことが、つい最近の事のように思い出される。昭和四三年家内と一緒に東京から広島へ、慰霊祭に参列したが、「去るものは日に疎んず」の例えどおり肉親を失った悲しい思い出も薄れようとしている時、新聞やテレビニュースで見聞きする被爆者の方々の苦しさを聞くにつけて、新たにアメリカに対する悲憤を禁ずることは出来ない。しかし日本国民が米国を憎む前に、真珠湾攻撃をやった日本の行為を、反省しなければいけないと思う。

七 復讐は神がなさる

「愛する者たちよ。自分で復讐しないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。何故なら主が言われる。『復讐は私のすることである。私自身が復讐する』と書いてある。むしろ、若し貴方の敵が飢えるなら、彼に食わせ、渇くなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、貴方は彼の頭に燃え盛る炭火を積むことになるのである。『悪に負けてはいけぬ』却つて、善を以て悪に勝ちなさい」と聖書に書いてある。

日本の為政者も悪かった。しかしアメリカもクリスチャンの国なら、真珠湾攻撃に、原爆をもって報いるべきではなかったろう。広島人は原爆に対する恐怖から逃れ得ない今日である。

原爆による広島 of 惨状は忘れない

●堀ノ内三丁目
村上 篤徳

(大正七年生まれ)

昭和二〇年八月、いよいよ本土決戦も近いという、苦しい戦争の末期であった。

我々工学部の学生も夏休みはなく、九月の卒業を目前にして、最後の授業に毎日通学していた（広島市千田町旧広島工専、現広島大学）。

八月六日の朝、警戒警報が解除されたので、皆実町の水光寮から、朝日に輝く御幸橋を渡って登校した。一時間目は数学である。広島 of 明るい夏の青空を、教室から眺めながら授業を待っていた。一時静かな八月の朝、東京育ちの私には、広島太田川の風景は、山近く、流れ清くとても美しい。

この時である。突如、何の音もなく、ピカピカピカー、ギリギリギリ、ものすごい閃光、太陽よりもっと強い、明るく眩しい光の襲来である。どちらの方向から来たかも分からず、周りじゅうから、ただ無数の閃光で、一瞬のうちに閃光に包囲されてしまった。桃色のような黄色のような閃光の海。下にもぐらねば危ないと思ひ、座席から立とうとした途端に、ドカンと爆風に飛ばされた。ちょうど大男の手で、顔、胸を

一度にがんと叩かれたようである。一メートル程とばされて、人事不省になった。はっと気が付くと、もうもうたる土埃、天井が落下して、机の下敷である。顔、胸から黒い血が吹き出している。左眼はもう流れ出た血で、つぶれ塞がっている。ガラスの破片が、顔や胸、手に刺さっている。木造二階建ての教室は潰れていた。

この瞬間に、中国地区第一の広島市は全滅した。これが原爆であろうとは、あんな大悲惨事が起きようとは、全く知らなかった。

更に爆発の状況を、原爆体験記（朝日新聞社、昭和四〇年七月発行）から拾って見る。

突然桃色のきつい光が、プール一杯にうなりを立てて落ちた。そう感じた瞬間、ドカンの音と一緒に校舎は崩れていった。私は直撃弾だと思ひ……一目散に防空壕に走った……ただ黒煙もうもうたる砂塵の中から、血みどろな人間が……安全な所へと分散しつつある声だけが聞えてくる……ふと足下を見ると、目を開くことが出来ない血みどろ

の男を発見した。

霜ふりズボンにゲートル、私はB君だと思った。「おい どうした」「ガラスが当たって血が目に入っちゃってね」

……（広島工専生、筆者その後消息不詳）

その体験記の一部であるが、その瞬間を眼前に想い起こさせる。目を開くことも出来ない血みどろの男、B君こそ、今日まで生き続けているこの私である。神仏の加護によるか、九死に一生を得ることができた。居所が少し違っていたら、閃光や爆風で、即死していたことだろう。

この原爆落下後の惨状は、誠に悲惨の極み、爆風、高温の熱線、放射能による傷害等、片目であったが、はっきりと目撃した。落下直後のあの凄惨な市民、子供の姿は、正に地獄であった。この地獄の中で、市民が町中で呻き、戦おのいでいた。ひどいのは、顔や手、背中や胸が紫色にただれ、ずるりと皮がむけて、垂れ下がっている大人や子供、誰の顔やら判明できないこの悲惨さ、正に地獄でなくて何だろう。とても言葉では表現できない生き地獄である。

まだ何か少し口が動いている人、痛いよ痛いよと言わんとしているのだろうか。口がもうはつきり動かない。真夏の太陽をうけても、痛さ苦しさで暑さなど感じないのであろう。ただ右往左往している。

真黒く火傷して、着物が半分焼けてしまい、体が見えてい
る娘さん、小母さん、シャツが半分焼けている人、軍服が半
分焼けてしまい、そのまま走っている軍人、水、水と力な

く叫んでいる哀れな子供、ペタリと座ったままで、もう動けない大火傷をうけた人、広かった道路も通れない位である。

二階家が上から押しつぶされたように倒れており、木造の橋は黒く焦げ、ちよろちよろと炎が出て、燃えはじめている。

市内電車が、レールに真横になって脱線している。恐ろしい爆風だ。

あちこちに血みどろの人たちが倒れているが、もう動くこともできない。惨酷の極みというほかはない。かわいそうで心残りだが、どうにも手のつけようがない。私も哀れなその中の一人であった。夢中であつたけれど、死んでたまるか、こんな爆弾で死んでたまるかと、心の中で呟いていた。

たった一発の原爆による恐怖の地獄絵だが、私には戦争の悲惨さとして、いつまでたっても忘れられない。原爆投下で被爆した広島を想うたび、いかに戦争が惨酷であるか、いかに戦争が最悪で、最大の敵であるかの認識を、一層深めるのである。

一滴の水

●高円寺南三丁目

師岡 金太郎

(大正二年生まれ)

今から四七年前の八月六日の状況を、記憶をたどって書いてみましょう。

昭和二〇年は八月に入っても広島は焼けつくような猛暑が続き、雲一つない快晴の六日の朝を迎えました。今思えば警報が鳴っても空襲のなかったのが不思議で、不気味な日が続いていました。

ところが六日の朝八時一五分ごろ、突如B29一機が襲来、一発の爆弾で死傷者二〇万とも三〇万とも知れない多数の犠牲者をだしてしまいました。その被害の詳しいことは、厚生省の調査でも不明の様です。

当時私の所属は暁部隊で、市の中心から南へ約三キロの地点宇品に近い大河おおこうという国民学校に宿泊していました。

朝食が始まる瞬間、はつきり憶えています。何かで頭を打たれたか夢中で小学生の机の下に潜りました。爆音、閃光、もの凄い爆風とその後におきた全市にわたる大火災で、まさに阿鼻叫喚、広島市は一発の爆弾で完全に崩壊してしまい、これが世界で初めて使われた世にも恐ろしい原子爆弾でし

た。木造二階建ての校舎は骨柱の一部だけを残して瓦解しましたが、幸い火災だけは免れました。多数の死傷者をだしました。

半身裸体で机の下で静まるのをまって我にかえた時、初めて天井から崩れた太い桁けたで後頭部を強打されたのに気付きました。未だに後遺症に苦しんでいます。九死に一生をえました。

破壊された校舎はやがて患者の収容所となり、多数の患者が人の背に、また荷車に乗せられて市の中心から長蛇の列をつくって入ってきます。火に弱い人絹、スフはボロボロ、身にまとっているものはありません。ひどい出血、その上皮膚が紫色にはれあがり髪の毛はバラバラ、男女の区別はつきません。

臨時に出来た収容所にはもちろん何の薬の準備もなく、恐ろしいほど被爆した気の毒な患者の手当というよりか整理に追われ、そのまま、筵むしろの上に寝かされているのが現状でした。

僅かな医務室の衛生兵ではどうすることも出来ません。患

者のほとんどが火と高熱におかされ体の自由を失い、ただ喉がかわいていてため兵隊さん水を、と微かな声で言うのが精一杯、一滴の水をどんなにか欲しがっていたか知れませんが。

兵隊も我を忘れ足を引きずり、コップの水を患者の口もとにあてているところを皆さん想像して下さい。目をとじて一滴の水をどんなに美味そうに静かに飲んでいましたか、しかしいつのまにか息をひきとって死んでいました。何と惨い哀れなことでしょうか。広島市の中心の疎開の整理に来た若い女性が多いようでした。可哀想で涙なくしてはいられませんでした。

私たちの部隊は傷ついた兵隊を残し、夜になって収容所に近い小高い裏の黄金山に移動し、他の部隊と集結して、いよいよ明朝をきして最後の激戦地と思われる周防灘に面した山口県の小さな漁村秋穂に向かうための出発の準備にかかりました（そこは終戦後人間魚雷の基地であることがわかる）。

夜間黄金山の小高いテントの外に出ますと、暗黒の夜空に市内のここかしこから点々として燃える青い異様な光は、なんと人生の終わりを告げる余りにも悲しい死者を茶毘に付している炎ではありませんか。

話は変わって、あれから四十数年過ぎ自由の身になった時、広島の大河国民学校を見たさに時の校長先生の諒解を得まして、肌寒い三月中旬フルムーンを利用して学校を尋ねました。先生は学期末の多忙な時にもかかわらず心よく迎えてくださり、広島復興の様相から学校が立派な鉄骨三階建ての新校

舎となった事など、詳しく案内してくれました。

私が一番早く見たかったのは、四七年前八月六日被爆を受けたあの恐ろしい思いをした二階の教室で、校長先生に無理に頼んで階段を駆けるように二階のここと思われる教室に行きました。そこには今年一組の札がかげられ、教室では若い男の先生と発育盛りの生徒が工作の授業中で、廊下の窓越しに見て思わず溜息をつき、しばらく茫然と立ちすくんで見入りました。

あの時、八月六日の朝地獄へ行つた思いに比べると、教室の中は和気あいあいとしてきながら極楽のよう、思い合せてハンカチで目をおさえました。

よかった、やっぱり来てよかった。あの教室を見ただけでも長い間の悩み心の痼もとれ、何か急に気持ち明るくなりました。広島という今までのイメージは自然に消えてゆくでしょう。

戦争は恐ろしい。私どもの年代の人々の反省は深い。